

## 人の愚行と神の知恵

高 田 太

奨励者紹介〔たかた・たい〕

学校法人梅花学園宗教主事

梅花女子大学心理こども学部こども教育学科准教授

日本キリスト教団同志社教会副牧師

ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせよう。

「いったいだれが主の心を知っていたであろうか。

だれが主の相談相手であっただろうか。

だれがまず主に与えて、

その報いを受けるであろうか。」

すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン。

(ローマの信徒への手紙 11 章 33—36 節)

### パウロの祈り

「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン」。お読みいただいた手紙の著者であるパウロはこのように祈っていました。

パウロという人は、元々は熱心なユダヤ教徒でキリスト教を迫害していたのに、キリストとの突然の出会いを与えられ、生き方を180度改めてキリストの宣教者として生き抜いた人物です。キリスト教はユダヤ教の分派としてパレスチナで生まれましたが、このパウロの働きによって、地中海世界北部のユダヤ教を

知らない異邦人に広められたと聖書は描いています。そんなパウロにとって、ずっと心に刺さっていた<sup>とげ</sup>刺

針<sup>はり</sup>はユダヤ人の救いの問題でした。ユダヤ教の側からすればパウロは裏切り者でした。新約聖書は、パ

ウロの活動において彼を付け狙い、その活動を妨害するユダヤ人の存在を描いています。彼はキリストに出会ったがために、かつての同胞に恨まれ、命を狙われるまでになっていました。

そんなパウロの問題は、もし彼がイエスの生前の言葉を知っていたとするならば、自らの前に敵として現れたユダヤ人を愛することができるのかということでしたし、そんなふうに分人に敵対し、キリストを否定するユダヤ人が神の救いに入れられているのかどうかということだったと思います。

ローマの信徒への手紙9章のはじめから今日の聖書箇所までは、そうした問題とのパウロの格闘の結果を示しています。詳細は省略しますが、パウロはすべての異邦人がキリストを信じるようになって、ユダヤ人もがキリストに繋がれる日を望み見ながら、そこに神の不思議なご計画があることを確信し、そして

そうしたご計画をもっておられる神の知恵を賛美して祈り、このユダヤ人の救いに関する議論を締めくくっているのです。「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン」。

## 二種類の祈り

ある人は祈りには二種類あるのだと語りました。一つは請求書の祈り。もう一つは領収書の祈り。請求書の祈りとは、文字通り神に何かを請求する祈りです。平和を与えてください、苦しみから救ってください、感染症を収めてください……そういう祈りがあるでしょう。もちろんそう祈るのが悪いわけではありませんが、でも願いがいつまでも叶えられないなら—請求に対する答えがないなら—神に何の力があろうかと疑い「この世界に神も仏もない」と転じてしまうことがあるかもしれません。これに対して領収書の祈りとは、神から与えられたものを数えてこれに感謝する祈りです。たとえば食事ができることへの感謝とか、今日も新しい日とこれを生きる命が与えられたことを感謝する祈りとかでしょう。

では、今日の聖書箇所でのパウロの祈りはといえば、これは領収書の祈りです。パウロは神から与えられたものに感謝し、その感謝の極まったところで神を賛美しているのです。では、パウロが何を神から受け取ったのかといえば、ユダヤ人の問題に関していえば何も受け取っておりません。彼の眼前にはいまだ自らに敵対し、キリストを否定するユダヤ人がいます。しかし、パウロは神の富や知恵、知識を信頼し、その信仰においてすべての異邦人がキリストに繋がれ、それを引き金にして次にはすべてのユダヤ人がキリストに繋がれる日が来ることを確信して、この恵みを先取りする領収書の祈りをしているのです。いまだに受け取ってはいないものを与えられると信じてこれに感謝していく—ここに祈りの究極の姿があると思います。

## 梅花女学校の澤山保羅

さて、こうしたパウロの祈りの姿勢、祈りの究極の姿を我がものとした人物として、私が勤めております

梅花学園の創立者、澤山<sup>ぼうろ</sup>保羅という人物がいますので、少しそのお話をしたいと思います。

梅花学園、その前身は梅花女学校ですが、同志社とは兄妹の関係です。1875年に新島襄によって同志社ができた後、1878年に梅花が生まれますが、双方、同じアメリカンボードという宣教団体、会衆主義教会に連なっています。同志社ができる直前には、アメリカンボードによって神戸女学院が生まれていました。そうして京都に同志社英学校と同志社女学校が生まれます。神戸と京都に学校ができた、次は大阪だということでアメリカンボードの期待に応えたのが澤山保羅でした。澤山は、アメリカ留学の中でキリスト教に出会って洗礼を受け、日本宣教の使命を与えられて帰国したのですが、彼はその時に元々の馬之進という名を捨てて自らの名を保羅に変えています。パウロからその名をもらったのです。新島も不思議な導きで聖書の人物、旧約聖書のヨセフから名前をもらっていますが、この二人が明治期の関西の日本宣教においては先駆者となりました。彼らに同志社英学校の卒業生、熊本バンドと呼ばれる人々が続きます。

澤山をその道に導いたのはグリーンという宣教師でした。アメリカンボード最初の宣教師として神戸に

やってきたグリーンのもとを澤山が訪れたところから彼の物語が始まりますが、グリーン宣教師は建築設計の能力もあって、同志社礼拝堂も、隣の彰栄館も彼の手になるものです。澤山は1883年、彰栄館の起工式に招かれて祈禱をしています。ただこの礼拝堂が建った1886年には澤山はすでに入院して死の床にありましたから、この建物を見ることはできなかったでしょうけれども、それでもこの礼拝堂は明治初期の日本宣教の姿を象徴的に示していると思います。礼拝堂の前には4本の梅の木が植えられていますし、「真理は寒梅の似し」という新島の漢詩が石に刻まれています。梅花は梅の花という名前ですし、新島が先の漢詩を読んだ時、彼は少し前に若くして世を去った澤山のことを思っていたはずですから—というのも、澤山の葬儀では新島が説教をしていますから—この礼拝堂において新島と澤山、そして彼らを結びつけ導いているグリーン宣教師の姿が美しく重なってくると思います。

### 澤山と新島、パウロとヨセフ

そんな二人、新島襄と澤山保羅ですが、では二人の仲が良かったかといえばそこは微妙です。主義が違いました。澤山は自給論を貫きました。外国のお金には頼らない、日本宣教は日本人の手によって為されるべきだという立場でした。対して、新島はアメリカの潤沢なお金をためらわずに用いました。しかし、そのことで大きな学校の礎石を築くことができました。この点で二人は厳しい対立をしたこともありましたが、それでもお互いをよく理解していたということは先の新島の漢詩に表れているでしょう。しかし、そこからさらにもう一步踏み込んでみれば、その関係を理解するための鍵というのが二人の名前にあると思います。

ヨセフは不思議な導きで外国への道を備えられながらも、そこで与えられた境遇、資産を十分に活かして危機にあった同朋を救い出すことができた人物でした。他方、澤山はパウロです。天幕職人であったパウロは自給の道を行きました。自分が宣教の対価としてお金をもらうくらいなら死んだ方がましだとまで言っています。そうするとこの二人が対立するのはもう必然だと思いますが、それにもかかわらず神から与えられた互いの役割を互いに認識して、信仰において励まし合うことができたと思います。

この両者の違いは、それぞれが生み出した学校にも現れていると言えるかもしれません。同志社は志を大事にする学校ですね。その名前から志の一字を取ってしまえば「同社」とわけの分からないものになるのだと言われます。対して、梅花が何を大事にするかと言えば「愛」です。梅花から愛を取ればどうなるでしょうか。アルファベットにして考えてみて欲しいのですが、BAIKAの真ん中にある「I」を取ったら実にひどいことになってしまいます。それだけ愛が大事なんだということで梅花においてもそう語り継がれてきたのですが、あんまり言うと梅花の方からも怒られます。

### 世界を肯定する力

では、愛とは何かということになりますが、澤山はパウロの精神からこれを体得していました。パウロもまた愛を説いた人物ですが、愛とは何かのヒントが今日のパウロの祈りにもあると思いますからそこに戻しましょう。「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン」。愛とは誰かへの思いやりであるとか、誰かの隣人になる姿勢だとか言われることもありますけれども、この祈りはそうしたものの根底にある愛を示していると思います。つま

り、すべてのものが神から出ている、そして神に向かっている。そうしたはかりがたい神の知恵を信頼して、神の視点からすべてを、つまりは世界を肯定すること、肯定できること—その力が愛ではないかと思うのです。愛は好きだということだと思いますが、パウロの言う愛は世界が好きだということです。世界を肯定する力です。

目下感染症が猛威を振るっていますが、澤山保羅も感染症、結核に苦しみ短命のうちに世を去らねばならなかった人物でした。しかし、彼は自らの病と短命を喜ぶことができました。ある手紙に彼はこう書いています。「からだの具合はよくありません。いくら発熱していて、頭痛があり、咳が出ます。全身が弱っているのを感じています。しかしながら、わたしは大変に感謝しているのです。なぜなら『神を愛する者たちには、つまり、ご計画に従って呼び出された者たちには、万事が益となるように共に働く』ということを感じているからです。そしてどんな状態であろうとも、『主よ、万事が上々です!』と言うことができます」(梅花学園沢山保羅研究会 茂義樹編『澤山保羅全集』 教文館 2001年 195頁 筆者訳。手紙の原文は以下の通り。I am also not well all the time. I have more or less fever, headache, cough, and so general feebleness in my entire body. Yet I am very thankful that I believe that “all things work together for good to them that love God, to them who are the called, according to his purpose,” and am able to say, in whatever condition I may be, “All well, Lord!”) 澤山も神の知恵を信頼して「All well, 万事が上々です」と、あるいは「すべてが素晴らしい」と言っています。ここでも世界の肯定がなされています。死病に冒され短命を自覚しつつ、この世界に生まれてよかった、万事が上々、この世界は素晴らしいじゃないか、と澤山は神に感謝することができるのです。

### ヨブという人の話

しかし、どうしたらそんなふうになんて神の知恵を信頼できるのか。世界を肯定できるのか—そうした問いが旧約聖書のヨブ記に書かれていて、私にはそれが同志社の「志」に関係しているように思われるので、その話を紹介します。ヨブという人の話です。

神を畏れる人であったヨブは、家族も財産をも奪われます。それでも彼はパウロのように祈ります。「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」(ヨブ記1章21節)。しかし彼はその祈りに留まることができず、自らの生まれた日を呪い、神へ問いはじめます。三人の友人が彼をなだめに来ますが議論は噛み合わず、ヨブは自分が神に出会って納得するまで問い続けると言います。神について聞いた知識で分かった気にならない誠実さ、問いに留まる力、良心が彼を一人にします。ヨブは神の知恵を問うたのです。世界が神の知恵によってよくできているならなぜ悪が必要か、なぜ正しい人が、私が苦しまねばならないのか。いや、お前だって悪をなしている、神の前に正しいものはいないという友人の議論を、ヨブは良心に誓ってやましいところはないと退けます。間違っているのは見たこともない神について知ったように語るあなたたちだと言うのです。

そういうことが延々と記されているのがヨブ記ですが、その結末は神ご自身がヨブの前に現れて、世界が人間には極めることのできない知恵によって創られ、保たれていることを圧倒的な仕方でも示し、これによってヨブが神の前に訴えを退けて悔い改めるといふのです。ヨブが人から聞いた知識によってではな

く、自ら問い、自ら疑い、そして自ら神に出会い納得した、言い換えれば信仰に至った、すなわち自分にはよく分からない神の知恵を信頼するに至ったということ、これが重要なのだと、たとえばイマヌエル・カントという哲学者が言っています。

### 良心の道

さて、申しあげたとおり、私にはなんとなくその結末に至るまでのヨブの道、ヨブの姿勢が同志社の志に重なるのです。同志社の学生時代、私はヨブ記が好きでした。個人の尊厳と良心とが確かに神への道になることを、ヨブ記は示しています。しかし、その過程でヨブは一人になるのです。志というのはそうした個人のものだと思います。私の志が大事であって、私なしの志もないはずです。

しかし、そういう私の志は、他者の行いを愚行だとして判断させることがあるでしょう。志は自らの正しさの意識と結びついています。私が正しいという意識が他者の批判に向かうわけです。

私たちのイライラは大抵ここから来ています。「あいつアホか」と思うことがたくさんあります。そういうのはいけないと思っていても、いろんな経験で「馬鹿につける薬」があったら欲しいと思ったりもします。私の思う正しいことが伝わらない時にそう思います。他者を肯定することが大事だとは言うけれど、ちっともこれができないのです。車の運転をする人はよく分かると思いますが、さっさと右折しろとか、追い越し車線をのろのろ走るとかイライラするのですが、それは他人の運転が正しくないと思うからですね。志の問題とは離れている気がするかもしれませんが、でも、私が高い志をもたねばならないのは、世の志が低いと思うからではないでしょうか。誰もが高邁な志を抱いて必死に生きていると信じることができないから、「私」がやらねばならないのです。

でもそういう私の志を掘り下げたら、神の志に行きつくはずだということをヨブ記は示していました。私は良心に駆り立てられることで、神の志につながるができるかもしれません。神の志は、天地創造に示されていますが、ご自身の造られた世界の肯定ですし、そこに秘められたその意志の、そのご計画の実現です。まだ私には分からないかもしれないけれども、そこに知恵があると信じるのができた時に、ヨブもまた神に出会うことができたのです。しかし、その途上で人は一人になり、世界を嘆き、友人の主張を愚かだとして退けねばなりません。

### 愛の道

パウロもまたこうした問題に苦しんだはずで。キリストを信じないユダヤ人、パウロを敵視する人々に面して、彼はそれを愚行とみなけねばならなかったでしょう。それでもパウロは先の祈りにおいて「すべてのもの」が神から出ているから大丈夫なんだと確信して神に感謝することができたのです。神の知恵の信頼が世界を肯定させ、世界に属する他者を肯定させるということが分かります。もちろん、すべてのものが神に向かっているということは、私たちがまだ途上にあるということを意味しています。神の知恵を信頼して神に向かう時、私たちは少しずつ愛を身につけて、世界を肯定して、他者を肯定する力を得ると思います。その肯定の力が今度は自分自身の存在をも肯定させて、それがきっと優しさや思いやりになって、私たちを神へと近づけてくれるはずで。梅花はこの愛を大切にしているのです。

しかしそうすると、私が同志社の志を梅花の愛に劣るものとして語っているように思われるかもしれませんが、最後に申しあげておくべきは、新島もまたキリスト教とは何かと問われれば「愛をもってこれを貫く」

と語っていたということです。新島は志に留まることなく、愛に突き抜けていったのです。その愛によって倜儻不羈なる生徒を愛することができたのです。そうであれば、倜儻不羈なる学生として（かどうか分かりませんが）同志社で志を養われている皆さんは、しかしぜひそこを突き抜けて、新島と同じ、愛の道を行っていただきたいと願っています。そうしてさらに付け加えて願うなら、新島と澤山、グリーン宣教師の思い出を留めるこの礼拝堂に、明治初期の日本宣教のドラマを想い、そこに神の知恵とそこにご計画とを、何より彼らを包み込んでいた神の愛を見いだしていただけたらと思っております。

2021年6月16日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録